

ハーディ小説の悪役たち

北脇 徳子

The Villains in Hardy's Novels

Tokuko Kitawaki

Summary

The villains cannot be the hero in Thomas Hardy's novels. They are, however, endowed the important role to influence greatly on the life of the heroine. The prototype of the villains is Troy, who deserts Fanny and marries Bathsheba, and leaves his wife after the deaths of Fanny and her child. Unfortunately, he is shot by Boldwood.

Troy's inheritors— Fitzpiers, Wildeve, and Alec—have common characteristics. All of them are sexually very attractive men. As they are philanderers, the women loved by them are deserted in the end. Without working hard, they indulge in gambling or romantic adventures with married women. They will not face any hardships, but escape from the realities, leaving their lands and their family. Although they win the heroine's love, their ends except Fitzpiers are miserable deaths.

The villains are negative characters who are not investigated into their psychological problems by Hardy, which makes them unable to be a hero.

序論

トマス・ハーディの主要小説に登場してくる悪役たちは、ヒロインの人生を大きく狂わせる負の存在である。彼らに共通しているのは、女たらしであり、教育を受けていて学識があっても、土地と繋がりを持たない故郷喪失者であり、働かないで、妻や遺産や親の財産を当てにして生きていることである。

『はるか群衆を離れて』のフランシス・トロイ軍曹は、ファニーを捨てて、バスシバ・エヴァディーンと結婚すると、軍隊を辞めてウェザーベリーの農場主になるが、妻のお金で賭け事に明け暮れ、農場経営の仕事を怠る。『帰郷』のデイモン・ワイルディーヴは、技師としての経験を持っているが、落ちぶれて、エグドンのはずれで居酒屋を営んでいる。トマシンと結婚するが、エグドン・ヒースをうろついて、元恋人のユースティン・ヴァイの呼びかけに昼も夜もいつでも応じる。『森林地の人々』のエドレッド・フィッツピアーズはリトル・ヒントックの医者であるが、グレイス・メルベリーと結婚すると、彼女の実家に住みながら、フェリス・チャーモンド未亡人と大陸に駆け落ちをする。彼には医者としての能力はあるが、村びとたちから尊敬される医者として働いている姿が描写されていない。『ダーバヴィル家のテスト』のアレック・ダーバヴィルは、新興成金地主の息子で、彼こそ全く労働を知らない。女性を情欲の対象としか見なさず、奉公人に次々と手を付ける漁色家である。

ハーディは、一人の女性を幸福にするために、陰日向なく働き、彼女を支え、村びとの信頼を得て、農村社会の伝統を受け継いでいく登場人物に、彼の作家としての想いや理想の人間像を託してきた。彼らは、『はるか

群衆を離れて』のゲイブリエル・オウク、『帰郷』のディゴリー・ヴェン、『森林地の人々』のジャイルズ・ウィンターボーンである。彼らは、恋のライバルである悪役たちに邪魔されるが、最後には女性の愛を勝ち取る。

オウクラとは対照的な悪役たちの出現によって、ヒロインは彼らの罠にはまり、危機的状況に陥る。その後の彼らの不在によって、事態が好転するかのように見えるが、彼らが小説の終盤に再び現れて、殺されるか、死ぬかによって、物語が終局に向かう。このように、彼らは、ヒロインの成長やプロットの進行上、重要な役割を演じている脇役なのである。

本稿では、トロイを始めとする悪役たちに焦点を当てて、彼らの素性や性癖を分析して、それぞれの作品にどのような役割を果たしているのかを展望する。

1章 フランシス・トロイ

『はるか群衆を離れて』は、ウェザーベリーの農牧作業を背景に展開される、ヒロインのバスシバ・エヴァディーンと彼女を巡る3人の男性たちの求愛小説である。最初に彼女の心を射止めるのは、トロイであるが、彼は恋人の遺体に対面して、感傷的になり海に飛び込んで行方不明になる。その後、バスシバが衝動的に送った「私と結婚せよ」(FMC 13章)というヴァレンタインカードを、深刻な啓示だと受け止めた中年の農場主ウィリアム・ボールドウッドが執拗に彼女に結婚を迫る。アメリカから帰郷して来たトロイが、ボールドウッドの屋敷で開催されているクリスマス・パーティに突然姿を現す。ボールドウッドは絶望のあまりトロイを射殺する。バスシバは、トロイが殺され、自分の軽率な行動が引き金になって、ボールドウッドの人生まで狂わせてしまったという自責の念と悔恨にさいなまれ、しばらく立ち直れない。オウクは、物語の最初からずっとバスシバに恋心を抱き、彼女の地主代理として、農場管理に力を尽くし、彼女を見守ってきたが、農場を去る決心をする。彼が去ると聞いたバスシバは、ここで始めて、彼の今までの誠意と控えめな愛の大きさに気づく。物語はこの二人の結婚で閉じるのである。

ハーディ小説の悪漢とは、トロイに代表される浮気者の女たらしである。彼は、フランス人の家庭教師とセヴァン卿との間にできた私生児である。彼はかなりの教育を受けているが、それを生かす術もなく、軍人になっている。彼の出身地はウェザーベリーである。しかし、居場所の定まらない軍人なので、「ウェザーベリーとの表向きの繋がりがあっても、ずっと故郷追放者である」(Hasan 35)。故郷に根を降ろしていない彼の考えは、利那主義である。「過去の思い出は邪魔なもの、未来の期待は不必要なもの」(FMC 25章)なのである。さらに、彼は「女性にはクレタ人のように嘘をつき」、「女性を射落とそうとする時のお世辞は偉力があり」、「一つのものになりながら、別のものに見せかける」(同章)二面性もある。ジョン・グッドは、「トロイには中産階級のロマンスのすべての虚飾が備わっている一貴族の遺伝、軍隊の訓練、性的魅力、不誠実な人生でさえも」(Goode 18)と評している。

トロイは、バスシバの亡くなった叔父の小間使い、ファニー・ロビンの恋人として登場する。彼はファニーと結婚しようと、カスターブリッジのオール・セインツ教会で待っていたが、彼女がオール・ソールズ教会と間違えて約束の時間に遅れる。待ちぼうけを食い、大勢の会衆の好奇な眼にさらされたトロイは、自尊心を傷つけられ、彼女を捨てる。彼に捨てられたファニーは、あちこち流浪の果てに、身重の体を引きずり、ウェザーベリーから、通りすがりの犬の体にしがみついて、カスターブリッジの救貧院まで辿り着く。彼女はそこで出産して死ぬ。ファニーと嬰兒の遺体は、バスシバの元に届けられ、彼女とトロイの結婚生活を破綻させる直接的な原因となるのである。

ファニーを捨てたトロイが次に誘惑するのはバスシバである。バスシバは夜更けに農場の見回りに出て、樅の林で、ドレスをトロイの拍車にひっかける。この時、彼女は、彼の「肩章と赤い軍服に目がくらみ」(FMC 31

章)、彼のお世辞に虚栄心をくすぐられる。シダの窪地で、彼の華々しい剣術に圧倒されたバスシバは、一瞬にして唇を奪われる。夜の暗闇の中で、提灯に照らされた軍服の赤と肩章の金属の光、稲妻よりもすばやい剣さばきによって、人工的な光を演出して、彼はバスシバを魅了するのである。トロイは「偽りの光の創作者」(Bullen 84)である。彼の剣術は生死をかけて戦う「戦争ではなく、芝居がかった見せびらかし」(Goode 25)であり、彼女の心を射止める性の罠なのである。

各地を転々と移動しながら、命を賭けて戦うというよりは、恋のアバンチュールを楽しんできた軍人のトロイは、バスシバと結婚をして、田舎の農場主になった途端にこの生活に飽きてくる。バスシバのお金を持ち出して賭け事に熱中し、古い屋敷を近代的なものに建て替えたいと言い出す。彼には農場主としての責任と能力が全くない。

二人の結婚と収穫を祝う席が、羊毛狩りの納屋で設けられた夜、トロイは、嵐の前兆を知らせるオウクに耳を貸さず、バスシバの皆に強いアルコールを飲ませないで欲しいという懇願を無視して、雇人たちに強い酒を勧める。彼の無分別な振る舞いのせいで、嵐の襲来の時に、全員が酔いつぶれるという醜態をさらけ出すことになる。「羊毛狩りの納屋は、もともと農村社会の本来の姿を象徴するシンボルであるが、トロイがいったん農場の主人になると、その墮落のシンボルになる」(Meisel 48)のである。幸いにも、オウクとバスシバの二人が協力して、麦におに覆いをかぶせて大損害を免れる。トロイは農場を破滅させる危険人物である。

ファニーと嬰兒の遺体が、バスシバに見せないようにというオウクの思慮深い配慮にもかかわらず、迎えに行った雇人の遅延で、バスシバの屋敷に一晚安置されることになる。バスシバはファニーが夫の恋人だったのではないだろうかという疑念を持ち、思い切って棺を開ける。そこには、夫が時計の裏のケースに入れていたのと同じ髪の毛の女性と嬰兒の遺体が横たわっていた。バスシバがこの恐ろしい事実には呆然としているところに、トロイがもどって来る。彼は、バスシバの目の前で、ファニーの遺体に優しくキスする。バスシバは、苦悶のあまり、自分にもキスして欲しいと彼に叫ぶ。しかし、「バスシバは、トロイが彼女にキスを拒否して、ファニーを彼の本当の妻だと呼ぶとき、さらに貶められるのである」(Langbaum 87)。

トロイは、生前には冷たい仕打ちをしたのに、ファニーが死んだら、感傷的になり、彼女の墓石を注文して、墓にさまざまな草花を植える。彼が疲れて眠っている間に降った強い雨が、樋嘴から墓に向かって吐き出され、「彼のロマンティックな振る舞いの無意味さ」(FMC 45 章)をあざ笑うかのように、草花が地中から洗い出されていた。彼の心に「この奇妙な事件」が「すべての中で最も鋭い刺のように」突き刺さり、突然「自己嫌悪」に陥ると、「自分のカードを投げ出して、当面の間も、それから、永遠にゲームを止めることを誓った」(FMC 46 章)。ロイ・モレルは、トロイとオウクを比較して、次のように評している。「トロイは災難や困難の単なる『見せかけ』に、すぐに、そして、完全に打ちのめされる」が、「オウクは本当の災難だったかもしれないものに対して、その上、彼の命の危険を冒して戦っている」(Morrell 124)。

トロイは衝動的に海に飛び込み、ラルウィンド・コウヴで遊泳中に帆船に助けられて、アメリカに渡る。そこで、体操や剣術やフェンシングの教師をしながら、あちこち渡り歩く。彼は恋人ファニーを捨てた過去を後悔しているにもかかわらず、現在の妻のバスシバをおろそかにしているのである。トロイは現実を見ようとしないロマンチストである。妻を捨て、故郷を捨てて、居場所の定まらないデラシネになる。

トロイはボールドウッドのクリスマス・パーティに、ディック・タービンに変装して再登場する。「変装は[中略]トロイの最も真実の姿である」(Goode 26)。彼が、変装したまま殺されるのは、彼の虚構の人生を象徴していると言えよう。

トロイはお世辞と剣術さばきと赤い軍服で、女性の心をみごとにつかむが、刹那主義で、その愛情は長続きしないので、結局のところ、ファニーを死に至らしめ、バスシバに悲しみと苦しみを与えることになる。農村社会にしっかり根を降ろして働く気力も能力もなく、現実に対処できないロマンチストなので、農場主としては失格であり、ここには彼の居場所はない。あちこち放浪するデラシネにならざるをえないのである。トロイ

はこのように負の要素が多い悪役である。

2章 デイモン・ワイルディーヴ

『帰郷』の背景となっているエグドン・ヒースは、文明を仇敵とする太古の自然の姿そのままであり、誰をも寄せ付けない凶暴な荒野である。この閉塞された土地で、村びとたちは荒野に生息するエニシダ刈りを生業としている。エグドン・ヒースは主人公たちに大きな影響を与える重要な存在である。エグドンを愛している者は生き残り、ここを嫌いここから脱出を図ろうとしたものは、死んでいくのである。

物語は、主人公のクリム・ヨーブライトを中心に、彼と結婚するが、ワイルディーヴの元恋人であるユーステイシャ・ヴァイ、ワイルディーヴと結婚するが、彼の死後、ディゴリー・ヴェンと再婚するトマシン・ヨーブライトの5人の恋愛と結婚が描かれている。彼らの他に、主要人物としてクリムの母であり、トマシンの伯母であるヨーブライト夫人が登場する。彼女は、クリムとトマシンの結婚に深く関わり、特にクリムとユーステイシャの結婚に強く反対する。その結果、クリムは妻と母と自分の夢との3つの葛藤を抱えることになる。

ここでは、6人の主要登場人物中、最も存在感が薄いのが、ユーステイシャとトマシンの二人の女性と関係を持ち、彼女らの人生を狂わせる悪役ワイルディーヴについて論じていく。

ヨーブライト夫人は、ヴェンのトマシンへの求婚を拒否する。彼の真っ赤に染まった服や顔に象徴されるベンガラ売りという職業を軽蔑しているからである。トマシンも、ベンガラ売りヴェンの誠実で一途な愛よりも、バドマスで技師をしていた、見た目のよい紳士然としたワイルディーヴを選ぶのである。ヨーブライト夫人は、ユーステイシャと浮名を流している居酒屋のワイルディーヴも全く信頼していないので、彼とトマシンとの結婚予告に異議申し立てをする。そこで、二人はアングルベリーで結婚式をあげようとしたが、許可書の不備で結婚できない。しかし、トマシンの強い希望と、一旦結婚しようとしていた男性と結婚できないという状況に置かれた姪の体面を思いやり、ヨーブライト夫人は彼らの結婚を認める。

ワイルディーヴは、「彼の動作にそなわった気品は特異なもので、女殺しの経歴をパントマイムふうに表示していた」、さらに、「男が感心するところは何もないが、女が嫌うものは何もない」(RN 1部5章)と描写されている。彼はユーステイシャとの関係を続けながらも、おとなしい素朴なエグドンの土地の娘トマシンと結婚するという不誠実な男性である。トマシンとの結婚式が不首尾で終わった夜も、ユーステイシャの炊くかがり火に引き寄せられて、暗闇の中を3マイルの道を歩いて、彼女に会いに来る。誇り高いユーステイシャは、「あなたなんか、私にはふさわしくないのよ」(RN 1部6章)と彼をけなしながらも、こうして、自分の偉力を試している。彼女は彼と結婚する意志は全くないのに、エグドンを脱出しようと駆け落ちの約束をする。そこへ、クリムが故郷に帰って来る。パリ帰りの後光に包まれたクリムに、バドマス生まれのユーステイシャはエグドンを出て、パリで享樂的な生活をしたいという夢を託す。そして、ワイルディーヴの申し出を断る手紙をヴェンに預ける。彼女に振られたワイルディーヴは、ユーステイシャへの腹いせにトマシンと結婚するのである。

トマシンと結婚してからも、ワイルディーヴはユーステイシャへの恋情が捨てきれない。ユーステイシャがクリムと結婚したことを知ると、彼女に対する思いが再び燃え上がる。「困難なものを望み、差し出されたものには飽きてしまう。遠くのを好み、近くのは嫌う。これがいつものワイルディーヴの性質であった」(RN 3部6章)と作者は説明している。トロイや、フィッツピアーズ、アレックもこの性質を共有しているのである。

ユーステイシャもクリムとの結婚に幻滅する。彼はパリに決して戻ろうとはせず、エグドンに留まり、村びとの教養を高めるための学校を開くという高邁な理想に燃えて、勉学に打ち込む。そして、眼病を患うと、ヒースのエニシダ刈りに甘んじているのである。エグドン脱出の夢が叶えられず、農民に成り下がった夫に失望

したユーステイシャは、日頃の憂さを晴らすために、一人で村祭りに出かけて、そこに居合わせたワイルディーヴと踊る。この踊りが彼のユーステイシャへの情欲を激しくかきたてるきっかけとなり、彼は暗くなってから、ユーステイシャとクリムの住む家の周辺をうろつきまわる。たいていはトマシンを守ろうとするヴェンが彼の行く手を阻むが、ワイルディーヴの夜の放浪癖は止まない。このことがユーステイシャに不幸をもたらすのである。

ワイルディーヴはバドマスで技師をしていたが、落ちぶれてエグドンでクワイエット・ウーマン・インという名の居酒屋を営んでいる。彼の地所は、長年苦勞してヒースを開墾して、耕地にした場所であるが、この土地を発見した男は過勞で死に、土地を引き継いだ男も土地改良で破産した。ワイルディーヴは「アメリゴ・ヴェスプッチのようにやって来て、先代の人たちに与えられるべき榮譽を受けた」(RN 1 部 4 章) ののである。バトラーは、ワイルディーヴの苦勞をして働いて獲得するのではなく、いつも利益だけを手に入れる生き方を次のように批判している。「トロイがウェザーベリー農場の恩恵に預かり、そこに何も投資しないように、ワイルディーヴも、他の人たちが施工した忠実な仕事の報酬をただ得るだけである」(Butler 47) と。

ヨーブライト夫人はこのようなワイルディーヴを決して信用しない。姪のトマシンがお金に困って、伯父の遺産を欲しいと言って来ると、ワイルディーヴには直接手渡さずに、クリスチャン・キャントルにトマシンとクリムの分を 50 ギニーずつ袋に入れて二人に届けるように申し渡す。ワイルディーヴは、クリスチャンをうまく担いで、賭け事でそのお金を奪ってしまう。それを見ていたヴェンは、ヒースの闇の中、土ボタルの光で、サイコロで賭けをして、ワイルディーヴから全部お金を巻き上げると、クリムの結婚式のパーティから帰って来たトマシンに差し出す。ワイルディーヴがヴェンにそのお金の半分はクリムのものだと言えなかったのも、何も知らないヴェンは、すべてトマシンに渡してしまったのである。これがヨーブライト夫人とユーステイシャの間に誤解を生むことになる。

クリスチャンから事情を聞いたヨーブライト夫人は、ワイルディーヴが彼から巻き上げたお金の半分以上をユーステイシャに渡したと勘違いして、彼女を詰問する。お金について何も知らないユーステイシャは、濡れ衣を着せられて、ヨーブライト夫人と激しい口論をする。ワイルディーヴの邪な行動が、ユーステイシャと義理の母親との仲を決定的に裂いてしまうのである。さらに、クリムが仕事に疲れて眠っている間に、ワイルディーヴがユーステイシャにふらりと会いに来たために、彼女は、仲直りをしにやって来たヨーブライト夫人がノックするドアを開けられない。クリムが寝言で母を呼んだのを、母親のためにドアを開けたと思ったのだとユーステイシャは言うが、間が悪いことに、そこにワイルディーヴがいたから自分が開けられなかったのだとは言えない。

ヨーブライト夫人が荒野の虻にかまれて死ぬと、クリムは母親の臨終の際に言った「息子に捨てられて死んだ」という言葉の原因を追究する。そして、ユーステイシャが窓からのぞいていたのに、ドアを開けなかった、そこに男性がいたという証言を手に入れると、彼女を激しく弾劾する。ユーステイシャはいっさい言い訳をせず、祖父のヴァイ大佐の家に戻る。彼女は、絶望して、バドマスから唯一の望みであったパリに渡ろうと思う。伯父の莫大な遺産を手にしたワイルディーヴは、ユーステイシャの家出のうわさを聞いて、彼女の身を案じ、バドマスまでの同行を申し出る。

ユーステイシャは、激しい雨の中で、逃避行をするのに必要なお金を持ってきていないことに気が付く。彼女はワイルディーヴの愛人として駆け落ちすることを屈辱だと感じる。「彼は、私が身を投げ出せるほど立派じゃない—私の望みには不十分!... サウルやボナパルトのような人だったら—ああ! でも彼のために私の結婚の誓いを破るなんて—あまりにも貧弱な快楽だわ!」(RN 5 部 7 章) と、ユーステイシャは悲痛な叫び声をあげる。

彼女は自分自身が英雄的な人物だと想像していて、自分の一番大きな失策は、人生の現実を受け止める

能力が無いのだということを理解できない。それで、究極的に、ワイルディーヴに自分自身を投げ出せないのである[後略]。(Vigar 139)

ワイルディーヴは、ユーステイシャを愛していながら、トマシンと結婚する。そして、クリムと結婚したユーステイシャにロマンティックな情熱を抱き、夜毎、彼女の周囲をうろつく。彼の行動は、トマシンを不幸にただけではなく、ユーステイシャとクリムを裂く大きな原因となった。彼はほとんど働かず、村びとも繋がりを持たない根無し草のように、絶えずヒースをさまよい歩いている。彼の唯一の関心は、ユーステイシャであるが、彼女の幸せを守るのではなく、彼自身が彼女の結婚生活を破綻させる原因を作ってしまったのである。彼は自分のために彼女が絶望のどん底に突き落とされたことを知り、彼女を救うためなら何でもしようと最後に決心する。二人は、エグドンを嫌い、ここから出て行きたいという願望をいつも口にしていた、やっとエグドン脱出の夢が叶うという時に、エグドンの堰に飲み込まれる。エグドンのシャドウウォーターの堰に落ちたユーステイシャを助けようと、ワイルディーヴは、堰に飛び込み、彼女と共に溺死する。トロイやフィッツピアーズやアレックと違うところは、ワイルディーヴのこの死にある。「魅力のないワイルディーヴは、無私の恋人であり、悲劇的な英雄になるので、最終的に正当化されるのである」(Langbaum 110)。

3章 エドレッド・フィッツピアーズ

『森林地の人々』は、人里離れた辺鄙な土地、リトル・ヒントックの森林地帯を背景に、ヒロイン、グレイス・メルベリーの恋愛と結婚が描かれている作品である。人物の配置は、グレイスを中心にして、一方の極に、他所から流入してきた都会人、エドレッド・フィッツピアーズとフェリス・チャーモンド、もう一方の対極に、リトル・ヒントックに生まれ育った土地の人、ジャイルズ・ウィンターボーンとマーティ・サウスが置かれている。グレイスは、この二つの対極の真ん中に位置し、どちらの世界にも属する人物として描かれている。この作品でグレイスを陰ながら操るのは、父親のジョージ・メルベリーである。彼は、『帰郷』のヨープライト夫人と同じ役割を担っているが、メルベリーの方が、もっと娘と密接な関係を保っていて、彼女の結婚を左右する鍵を握っている。

メルベリーは、リトル・ヒントックで材木商を営む裕福な実業家である。彼は、ジャイルズの父親の許婚者を奪ったという過去を、グレイスとジャイルズを結婚させて償おうと計画している。もう一つ、若い時に自分の無学を級友たちに笑われた苦い経験を持っていて、娘を教育して、彼らを見返してやりたいと願っている。彼のこの矛盾する二つの願いを実現する駒として使われるのが、グレイスである。グレイスをジャイルズと結婚させるのであれば、当世風の教育を受けさせる必要はなかった。彼女は同じ土壌で育った田舎娘として、すんなりと彼を受け入れたであろう。ところが、都会で教育を受けたグレイスは、もう昔の田舎の世界に戻れない。彼女は、「現代的な神経と原始的な感情を併せ持っていて、こうした組み合わせゆえに、苦悩する人間」(W 40 章)となるように運命づけられているのである。

グレイスが都会的なセンスと上品さ、知的教養を身に付けて帰郷すると、父親の「世俗的願望」(W 12 章)が強くなり、彼女を上流社会に入れようとする。まず、グレイスをリトル・ヒントックの土地所有者であるチャーモンド夫人に表敬訪問させる。次に、かつて近隣の土地を支配していた名門の貴族の末裔である、若い医師のフィッツピアーズとの結婚のお膳立てをする。グレイスは父親の強い勧めとフィッツピアーズの強引な求婚に屈服して、彼と結婚する。娘が夫に裏切られて不幸になると、メルベリーは新しい離婚法に希望をつなぎ、彼女をジャイルズと再婚させようとする。ジャイルズは彼女との結婚を一旦諦めていたのに、また、ほんの少しの間だけ、結婚の希望を持たされ、最後にその夢が完全に断たれた時、彼に残された道は、小さい頃からず

っと愛してきたグレイスのために死ぬことしかない。メルベリーは、このように、娘や友人の息子を翻弄するエゴイスティックな父親である。

フィッツピアーズとチャーモンド夫人は、リトル・ヒントックの土地の人ではなく、他所から入ってきた侵略者である。フィッツピアーズはジャイルズの許婚者を奪い、チャーモンド夫人はジャイルズの土地と家を奪ってしまう。

フィッツピアーズは丘の中腹に間借りをしている開業医である。彼は多くの女性を同時に愛することができる。この点において、トロイ、ワイルディーヴ、アレックと同類である。村の娘で恋人のいるスーク・ダムスンと関係を持ち、グレイスと結婚後はチャーモンド夫人と情事にふける。彼の興味は女性だけではなく、趣味の範囲も広く、錬金術、占星術、天文学、解剖学、詩学、抽象哲学などのさまざまな学問に、その時々気分に応じて熱中する研究者タイプである。トロイもワイルディーヴも現実を直視する能力に欠け、ロマンティックな性癖を持っているが、フィッツピアーズは、医者という職業が与えられているだけに、彼らよりもさらに学識豊かである。彼は、「現実の世界よりも観念の世界を、原理の応用よりもその発見をずっと好んだ」(W 16 章)と説明されている。読書家で知的な観念論者であり、シェリーの詩をくちずさむ彼の姿は、まさにエンジェル・クレア(『ダーバヴィル家のテスト』)やスー・ブライドヘッド(『日陰者ジュード』)の前身である。エンジェルやスーもまた、彼らを愛した相手を死に至らせるという点では、悪役である。テストがエンジェルの観念的な性格に惹かれたように、グレイスもフィッツピアーズの「洗練された教養豊かな内面の生活や繊細な心理的交流が得られる可能性」(W 23 章)に惹かれる。これが教養を積んだグレイスが、ジャイルズではなく、彼を結婚相手に選んだ理由である。

フィッツピアーズの得体のしれない研究を「悪魔に魂を売った」(W 4 章)とうわさしながら、村びとたちも貴族の出身だということで、彼を尊敬している。しかし、没落貴族で、財産がない彼は、グレイスと結婚すると、メルベリーの屋敷で開業する。すると、村びとたちは彼をもう雲の上の人ではなく、自分たちと同等の者だと思い始める。彼を包んでいた後光が消えると、彼は凡庸な医者に格下げされ、だんだん患者数が減っていく。誇り高い彼はそれをグレイスとの結婚で自分の格が落ちたせいだと、村びとと同類であるグレイスを疎み始める。もっと村びとたちと交流して、彼らから信頼され、医者としての実力を認められるように励むのが、彼の現実的に取り組む課題であろう。しかし、エンジェルやスーと同じく、観念論者なので、現実をしっかりと認識できないのである。グレガーも、「彼は自分自身以外のどんな世界の現実も、それが森であろうと、そこに住む人々であろうと、感じることはできないのである」(Gregor 151)と批評している。フィッツピアーズがグレイスとの結婚生活に嫌気がさしたちょうどその時に、チャーモンド夫人という新しい浮気相手が出てくる。酩酊して、グレイスとの結婚を愚痴るフィッツピアーズは、義理の父親メルベリーに馬から落とされて重傷を負うと、チャーモンド夫人に助けを求める。この後、二人はリトル・ヒントックを逃げ出して、大陸へ行ってしまふ。

チャーモンド夫人は女性版の悪役である。彼女は、ルセッタ・テンブルマン(『カスターブリッジの町長』)の後継者であり、その人物像はハーディの最後の小説に登場するアラベラ・ドン(『日陰者ジュード』)に引き継がれる。

チャーモンド夫人は馬車の転倒でかすり傷をして、若い医者のフィッツピアーズを屋敷に呼び寄せる。優美な姿で煙草を吸いながら寝椅子に横たわって、彼を待ち受けるその姿は、自分が見られることを意識したポーズであり、男性を虜にしよう待ち構えているセクシュアリティの表象である。かつてハイデルベルグで自分に憧れを抱いていた若者と彼が同一人物であることがわかると、彼女は彼に急接近する。知的な医者のフィッツピアーズは、人生に退屈している裕福な未亡人の恰好の遊び相手である。彼も、現実から逃げたいと願っている矢先で、財産家で、美しく、魅惑的な夫人に飛びつく。二人の情事は「退廃的で、センチメンタルなロマンス」であり、「無限の空想、無意味な夢、快楽趣味の憂うつ」(Williams 173)を糧としており、現実離れを

している。

フィッツピアーズとチャーモンド夫人の情事は、マーティ・サウスが夫人の豊かな髪の毛は、自分が売ったものだという秘密をフィッツピアーズに手紙で暴露したことによって終わる。彼はその事実を知って、恋の熱が冷める。夫人は、去っていく彼を追いかけて行った道中で、彼女をずっと付け狙っていたイタリア系アメリカ人の元恋人に射殺される。チャーモンド夫人は、お金の力でマーティの髪を奪い、性的魅力でグレイスの夫を奪い、一時の憤りでジャイルズを破産させる。チャーモンド夫人は、『森林地の人々』における一番の悪人であろう。彼女が射殺されて、フィッツピアーズはグレイスの元に戻って来ることになる。

戻って来たフィッツピアーズから逃げるように家出したグレイスは、ジャイルズの隠れ家に滞在し、ジャイルズがそのために雨風に晒されて、チフスにかかって死ぬと、夫の求愛を再び受け入れる。新妻スークとフィッツピアーズの仲を疑い、彼に報復しようとティモシー・タングズの仕掛けた人取り罠にかかったのは、グレイスのドレスであった。これがフィッツピアーズとグレイスの仲直りを取り持つという喜劇的な顛末になる。フィッツピアーズは、娘を自分の所有物だと思っている父親から、今度は彼女の意志で、グレイスを再び勝ち取る。彼は唯一生き残れる幸運な悪人である。

4章 アレック・ダーバヴィル

『ダーバヴィル家のテス』のアレック・ダーバヴィルは、商売で財を成した商人の息子である。父親はイングランド南部に移り住むにあたり、大英博物館で見つけたダーバヴィルという名が気に入って、その名を元のストークに付け足した。このストーク＝ダーバヴィルは偽のダーバヴィルなのである。その事実を知らないテスは親戚の名乗りをあげる役目を負わされて、アレックの屋敷を訪れる。そこは、古いお屋敷を想像していたテスの期待とは全く異なっていた。明るく手入れの行き届いている敷地や「純粋に楽しみだけのために建てられた」屋敷など、「あらゆるものが金に見えた一造幣局から造り出されたばかりの金のように」(TD 5章)とある。テスも「私たちは古い家柄だと思っていた。でもここはみんな新しいわ！」と言っている。

アレックには、浅黒い粗野な輪郭の顔、赤い唇、黒い口ひげがあり、「紳士の顔と不遜なくるくる回る目にはある種の特異な力があつた」(同章)。彼がテスの運命を狂わせる存在であることは、「彼の邪悪な顔、煙草の煙と彼の本当の名前(ストーク)から来る特徴的な外見」(Butler 91) から伺える。彼は、次々と自分の欲望の赴くままに、周囲の娘たちを彼の性欲の餌食にしている。それは、「トラントリッジ周辺の娘たちの何人かのはしたなさは際立ったものであり、おそらくその近くにあるスロープス荘を支配している、あの選り好みの精神を表しているのであろう」(TD 10章)と表現されているからである。イアン・グレガーは「アレックの世界、ストーク＝ダーバヴィルの世界は、19世紀のレッセフェールの資本主義と切り離せないが、それは、望むものはお金で買えるという、ブルジョア特有の倫理の勝利である」(Gregor 192)と指摘している。

アレックは初対面のテスの豊満な容姿と美しい顔に惹かれる。彼が初対面でキスを強要したことや、トラントリッジで雇われてから、しつこく付け狙っていることに恐怖を覚えて、テスは用心深く彼を避けていた。ところが、彼女は遂に捕まってしまう。チェイスバラの市からの帰り道に、この前までアレックのお気に入りだったスベードの女王、カー・ダルチが頭に乘せている籠から、糖蜜が背中に一筋のロープのように垂れ下がっているのを見た皆が笑い出す。笑いものになったカーは、テスの落ち着いた豊かな笑い声に苛立ち、対抗意識を燃やして彼女に詰め寄る。威厳を持って彼女の挑戦を受け止めたテスだが、「こんな淫売たち」(TD 10章)と暴言を吐いたため、数人の女性たちも加わって、テスにかかってくる。この危機的状況から脱するために、テスは背後から忍び寄ってきたアレックの馬に衝動的に飛び乗る。こうして、アレックはチェイスの森でテスの処女を奪うのである。アレックはまさに無垢なイヴを誘惑するサタンである。

この事件の数週間後、テスはトラントリッジを去る。テスはアレックを恐れたり、彼に屈したりしたこともあったが、一度も愛したことはない。「一時的に彼の熱烈な態度に惑わされ、しばらくの間、混乱して言いなりになった、そして、突然彼を軽蔑して嫌うようになり、逃げて来た」(TD 12 章)のである。テスはアレックに肉体を征服されても、独立心に富んだ不屈の精神は、彼のものにならなかった。テス以外の女性だったら、アレックに結婚するように迫ったであろうが、テスはアレックから逃げて、一人で子供を産み育てる。

テスは赤ん坊が死ぬと、再び、トルボットヘイズの酪農場で乳搾りとして働く。そして、ここに酪農を習いに来ていた牧師の息子、エンジェル・クレアと恋に落ちて、結婚する。結婚の初夜に、テスがエンジェルにアレックとの過去を告白すると、進歩思想を持っていた筈のエンジェルであるが、突然、古い因習に逆戻りして、処女ではない彼女を受け入れることができない。彼は「ピンクの頬を確実に手に入れることができるのと同じように、田舎の清純さを手に入れられる」と思ったと語る。彼の性質の奥深いところに、「柔らかいローム層の中の一筋の金属のように、堅い論理的な鉱床が隠れていた」(TD 36 章)のである。

テスはエンジェルに捨てられると、昔の仲間のメアリアンを頼って、冬空の下で、フロントクム＝アッシュ農場で蕪掘りの過酷な労働をする。ブラジルに行ったまま音信不通のエンジェルに見捨てられたテスは、意を決して、エミンスターの牧師館に彼の両親を訪ねるが、彼らに会う勇気がなくて引き返す途中に、アレックに出会う。彼は、老クレア牧師の影響を受けて、メソディスト派の説教師に変身していた。彼女は、エンジェルへの忠誠心と彼の妻であるという誇りを持って、彼の言葉を語り、アレックの改宗を否定する。

偶然テスに出会って、再びアレックの情念の炎が燃え上がり、彼は宗教をかなぐり捨て、テスの働いている農場にやって来る。今度は結婚許可証を持って来るが、彼女はすでにエンジェルと結婚している身である。すると、今度は、テスに貧しい一家の経済的援助を申し出て、夫を捨てて、自分のものになれと言い寄る。彼のこの申し出に対して、彼女は、思わず皮手袋で彼の顔を激しく打って叫ぶ。「一度餌食にされれば、いつも餌食になるのよーそれが掟だわ！」(TD 47 章)と。グレガーはこの場面を、「彼女は、一人の不当に扱われた女性としてではなく、今は自分自身の過去を受け入れ、そして自分の全遺産から力を引き出す者として、彼に異議を唱えている」(Gregor 193) のだと分析している。

終身土地使用者であった父親のジョン・ダービフィールドが死ぬと、一家は家を追い出される。路頭に迷う家族を前にして、テスはアレックの執拗な援助の申し出にもはや抗しきれず、再び自分自身を犠牲にして彼に屈服するのである。テスは自分一人が飢えるのであれば、最後までエンジェルへの忠誠心を貫いたであろう。しかし、彼女の肩には家族全員の存否がかかっており、自分の美德のために彼らを不幸にしてはならないのである。

彼女は、今や戻って来ないと思われるエンジェルに対する「つまらなくて、空しい貞節」をぜいたくにも守るために、彼らへの責任を放棄することができなかつたのである。それ故に、彼女の中にあるヒューマニストが、このように、アレックに身を任せて、自分を犠牲にするようにと導いたのである。(Dave 163)

アレックは、テスを捨てたエンジェルの代わりに、彼女の一家を養うのだが、それには、テスが彼の愛人になるということが絶対的な条件である。アレックは経済的な援助と引き換えに、テスを所有したいのである。テスが二人の男性をうまく操るアラベラのような性格であれば、悲劇にはならなかつたであろう。しかし、テスはいかなる苦境にあっても、エンジェルを崇め、愛しており、アレックのものになるのは、彼女にとって死を意味する。彼女はこれ以後、精神的に死んでおり、家族のために肉体だけ生き続けているのである。

物語は、エンジェルの帰還、テスのアレック殺害、テスとエンジェルの逃避行を経て、テスの死刑で終局を迎える。アレックはその経済力でテスを肉体的にはものにできたが、彼女の精神は、彼に屈することはなかつたのである。

結論

ハーディの主要小説における悪役たちの系譜を、トロイ、ワイルディーヴ、フィッツピアーズ、アレックと作品の出版年度順に論じて来た。彼らにはヒロインたちの夫、恋人、愛人の役割がそれぞれ与えられているが、いずれも女性遍歴の多い女たらしである。トロイは、ファニーを捨てて彼女と嬰兒を死なせ、さらにバスシバを捨てた後に、おめおめと戻って来てボールドウッドに射殺される。ワイルディーヴは、ユーステイシャと付き合いながら、トマシンと結婚して、ユーステイシャがクリムと結婚すると、彼女への恋情を再び燃え上がらせて、最終的に彼女を救うために溺死する。フィッツピアーズは、三人の女性を同時に愛せる男性である。村の娘のスークと関係を持っていたが、グレイスと結婚する。その後すぐに、チャーモンド夫人との情事に夢中になり、二人で大陸へ駆け落ちをして、夫人が元恋人に射殺されると、グレイスの元に戻って来る。グレイスが心を寄せていた昔なじみのジャイルズが死ぬと、フィッツピアーズは再びグレイスと仲直りをして、二人でリトル・ヒントックを去る。アレックは女性を欲望の対象としかみない男性である。テスの肉感的な美しさに惹かれ、処女を奪うが、彼のお金の力でもってしても、彼女の愛情を得ることができない。テスは彼との過去をエンジェルに告白して、彼に捨てられる。テスは苦境に耐えるが、家族の困窮をすくうために、再びアレックの愛人になる。エンジェルが帰還すると、テスはアレックを殺害する。

トロイは軍人でロマンチストなので、農場主として無能であり、土地に居場所のないデラシネである。ワイルディーヴはバドマスから来て、エグドンからは抜け出せないで、ヒースをうろつきまわっている。彼は、ヒースを嫌っているので生き残れない。フィッツピアーズは趣味にも学問にも女性にも気の向くままに熱中している。もちろん他所から来た都会人であるから、土地を去って行く。ハーディの初期と中期の作品の舞台は、ウェザーベリー、エグドン・ヒース、リトル・ヒントックの農村や森林地であるが、後期の『ダーバヴィル家のテス』の舞台は、ヒロインが場所を移動して働くので、特定の場所が限定されていない。そのために、アレックもヒロインに合わせて出沒している。いずれの人物も土地にしっかりと根を降ろして、伝統を守って生きていくタイプではない。

トロイは働かないでバスシバのお金で賭博をし、ワイルディーヴは伯父の遺産でエグドンを脱出しようとし、フィッツピアーズは妻の実家に寄寓をし、また、チャーモンド夫人のお金で大陸への逃避行をしている。アレックは父親の残してくれた遺産で生きている。彼らは一様に働かない人物である。

ハーディの悪役たちの一番大きな存在理由は、彼らがヒロインの人生を狂わせる役割を担って登場してきたということである。トロイは、女性には非常に魅力的な男性である。誰とも結婚したくないと言い放っていた高慢なバスシバを射止めて、結婚する。彼女が、捨てられた妻、そして、未亡人という試練を経て成長して、彼女に最もふさわしい伴侶と結ばれるためには、悪役トロイは無くてはならない存在なのである。

ワイルディーヴとアレックの二人は、次の点において似ている。ワイルディーヴは、ユーステイシャにとって結婚するほど魅力的な男性ではない。彼女はクリムに憧れて結婚したが、やはり彼を愛していて、最後まで、彼に誠実な妻であろうとしている。一方、アレックはテスにとっては誘惑者サタンに他ならない。彼女はエンジェルを愛しており、アレックに対しては、肉体を任せても精神は彼に屈していない。しかし、二人の相違点は、ワイルディーヴはユーステイシャの苦境を理解していて、彼女を自らの命を顧みずに助けようとして死ぬが、アレックは、テスの気持ちを理解せず、彼女の苦境に乗じて、自らの欲望を満たした悪人なので彼女に殺されたことにある。

ハーディ小説の悪役たちは、ヒロインの人生に大きく関わっており、彼らの存在なくして物語は進行しない。プロットの進行にも必要な人物である。『カスターブリッジの町長』の主人公であるマイケル・ヘンチャードだけを除いて、彼らはヒーローにはなり得ない。それは、作者が、彼らの苦悩や内面まで深く立ち入った描写を

していないからであろう。そのために、彼らは魅力に乏しい、ステレオタイプ的な人物像になっている。しかし、その中でも、フィッツピアーズは、グレイスの愛情を繋ぎ止めるのに成功した人物として、ジャイルズの引き立て役として丁寧に描かれている。そして、彼のような浮気者と一緒になるヒロインの不幸を用意するためにも必要な悪役なのである。

注

1. 本稿の1章は、「バスシバを巡る三人の男性たちーオウクを中心にー」（『「はるか群衆を離れて」についての10章』共著、音羽書房鶴見書店、2017）のトロイに関する章を大幅に修正し、加筆したものである。
2. 本稿の3章は、「ジャイルズ・ウィンターボーン之死」（『京都精華大学紀要』第51号、2017）のフィッツピアーズに関する章を大幅に修正し、加筆したものである。
3. 作品の略称を以下に記す。

FMC *Far from the Madding Crowd*

RN *The Return of the Native*

W *The Woodlanders*

TD *Tess of the d'Urbervilles*

引用文献

Bullen, J. B. *The Expressive Eye: Fiction and Perception in the Work of Thomas Hardy*. New York: Oxford UP, 1986.

Butler, Lance St John. *Thomas Hardy*. Cambridge: Cambridge UP, 1980.

Dave, Jagdish Chandra. *The Human Predicament in Hardy's Novels*. London: Macmillan, 1985.

Goode, John. *Thomas Hardy: The Offensive Truth*. Oxford: Basil Blackwell, 1988.

Gregor, Ian. *The Great Web: The Form of Hardy's Major Fiction*. London: Faber and Faber, 1974.

Hardy, Thomas. *Far from the Madding Crowd*. The New Wessex Edition. London: Macmillan, 1974.

Hardy, Thomas. *Tess of the d'Urbervilles*. The New Wessex Edition. London: Macmillan, 1974.

Hardy, Thomas. *The Return of the Native*. The New Wessex Edition. London: Macmillan, 1974.

Hardy, Thomas. *The Woodlanders*. The New Wessex Edition. London: Macmillan, 1974.

Hasan, Noorul. *Thomas Hardy: The Sociological Imagination*. London: Macmillan, 1982.

Langbaum, Robert. *Thomas Hardy in Our Time*. New York: St. Martin's Press, 1995.

Meisel, Perry. *Thomas Hardy: The Return of the Repressed: A Study of the Major Fiction*. New Haven: Yale UP, 1972.

Morrell, Roy. "A Novel as an Introduction to Hardy's Novels (1965)." *Thomas Hardy: Three Pastoral Novels*. Ed. R. P. Draper: London: Macmillan, 1987. 116-28.

Vigar, Penelope. *The Novels of Thomas Hardy: Illusion and Reality*. London: The Athlone Press, University of London, 1974.

Williams, Merryn. 'A Post-Darwinian Viewpoint of Nature' (1972). *Thomas Hardy: Three Pastoral Novels*. Ed. R. P. Draper: London: Macmillan, 1987. 170-79.